

布に巻かれた救い主

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 2章 8節～20節

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。

羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりにだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

[序] クリスマスを祝うとは

私たちは誰かの誕生日に「ハッピーバースディ」を歌い、「〇〇さん、或いは〇〇ちゃん、お誕生日おめでとう！」とお祝いすることがあると思います。当然のように。そして私たちは今年もイエス・キリストがお生まれになったその日を来週迎えます。その時、つまりクリスマスの時、私たちは「イエス様、お誕生日おめでとう！」と言うのでしょうか？…もしそのように言っても酷くおかしな事ではないかもしれませんが、小さな子どもが「イエス様、お誕生日おめでとう！」と言うのは微笑ましいと思います。けれども、私は少々違和感を感じてしまうのです。

このお方の誕生日を迎えるということは、お祝いしてあげること、このお方のバースディパーティをしてあげることでしょうか？そうではなく、逆に私の方が、このお方に聴くこと、そしてこのお方を地上に送って下さった神様のメッセージすなわち「天」の声に聴くことではないかと思わされています。

[1] 「天」と「地」が口づけした日

ルカによる福音書は丁寧にクリスマス物語を描写しています。先ほど読んで頂い

た所です。この箇所をまたじっくり読んでみた時、私はここには「天」と「地」の織りなすドラマがあるなあと思いました。もっと言うならば、「天」と「地」が口づけした日の物語と言ったらよいでしょうか、神様は、羊飼いと**いう貧しい生活者の存在**を用いながら、天の世界と地上の世界とを繋げて下さったように思えるのです。

ルカはそのあたりのことを意識していたのではないのでしょうか、その描写は、ある意味とても緻密です。

順を追ってみると、その描写は地上から始まります。本日の箇所に先立つ2章1節から7節まで、これは「地上」の物語です。当時の**政治状況と強大なローマ皇帝**のもとで振り回されているようなユダヤ人たち、また**ヨセフとマリア**がいます。そのマリアから主**イエス**は、**宿の外**で生まれ、**飼い葉桶**で寝かされています。そして、8節以下はこうです。「地」の物語に「天」の出来事が介入してきます。

- ・ 2章8節(地)—野宿をしながら羊の番をする羊飼いたちの姿
- ・ 9節(天と地)—天から天使が現れ、主の栄光に羊飼いたちは恐れる
- ・ 10～12節(天)—あなた方のために救い主が生まれたとの天使の知らせ
- ・ 13～14節(天)—天の大軍の讚美
- ・ 15節(天から地へ)—天使は去り、その直後の羊飼いたちの受け止め
- ・ 16節(地)—急いでベツレヘムへと向かい、飼葉桶の中の幼子を見つける羊飼い
- ・ 17節(地)—この出来事を人々に知らせる羊飼いたち
- ・ 20節(地から天へ)—羊飼いたちの中に湧き起こる、天に向かう讚美の声

この流れの中心に置かれているのが14節の**天使たちの大合唱**です。まるで聖書という本がスピーカーのようになって、ここから大コーラスが響いてくるようです。

天使たちは歌いました。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に**適う人**にあれ」と。いと高きところ、つまり「天」には、神に栄光があるように、また、「地」には**平和**があるように、それが天使たちの讚美でした。片方だけではないということが大事なのだと思います。神様の御名が讚えられることと人間の地上の生活が平和で満たされること、それは一つのことなのです。

これは当たり前の事ではありません。私たちにとって**まことの平和**とは何なのでしょうか。私は、それはこの時の羊飼いのように、素朴に真直ぐに神様のメッセージに聴き、それに驚き、自分の生活をその言葉に“開いて行く”“明渡してゆく”ことから始まるものなのではないかと思うのです。神様抜きの、人間が作る平和というのは、**パワーバランス**のもとで作られる平和、例えば武器輸出で儲けを生み出し、強者と敗者、富める者と貧しき者の「格差」が支えるような平和になってしまうのです。それを「秩序」と勘違いしてしまい、私たちはいつしかそのことに鈍感になってしまいます。ルカが記す「**皇帝アウグストゥス**」の時代というのも、正にそのような

時代であったのです。

そうではなく、「**地には平和**」、それが「**御心に適う人にあれ**」と天使は歌いました。御心、神様のお言葉、それを聴いて行くということが正に平和への道なのですね。

[2] 「飼葉桶」の中に生まれたキリスト

天を覆うような栄光の中で、恐れている羊飼いに天使が、告げたメッセージをご一緒に聴きましょう。

「**恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。**」(2:10~12)

「**この方こそ主メシアである**」と言います。何ということでしょうか！待ち望んでいた**メシア・救い主**は、世直しをしてくれるようなこの世に影響力を持つ大人として現われたのでも、ましてや富豪でも哲学者でもなく、全く無力な乳飲み子、赤子としてお生まれになり、しかも、家なし、ベッドなしの「**飼葉桶**」の中に寝かされているのです。少し前の7節では「**宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである**」とあります。いくら人々でゴった返していたとしても、お腹に赤ちゃんを抱えた若い夫婦を泊める空間を誰か用意出来なかったのでしょうか？恐らくお金を沢山払えば譲ってくれたのではないのでしょうか。これは**人間の罪**ですね。ヨセフとマリア、そして生まれてくる救い主は、もうこの時から「**人に捨てられる**」という経験をしています。「**飼葉桶**」というのは、神の子が追いやられた姿、神の子を拒否した姿なのです。そして驚くべきことに、これこそが「**救い主のしるし**」なのだと言聖書は語るのです。

私は、一年位前、心が震えるような、あるイエス様を描いた絵を見ました。それは力強いイエス・キリストの姿でも、栄光に輝くイエスの姿でもありません。このイエス様は、寒空の中、ある行列に並んでいるのです。その作品は、アメリカの**フリッツ・アイヘンバーグ**という人の版画絵で、「**炊き出しの列に並ぶキリスト**」という絵です。もう80年ほど前の作品だそうです。このような絵です。

炊き出しの食事を待っている人々がいます。冬なのでしょう、よれよれのコートを着込んだ男たち、また女性もいますが、一列に静かに並んでいます。コートの襟を立てたり、ポケットに手を突っ込み、寒そうにしています。そして**その列の仲間として**、マントを羽織った**イエスも列に並んでいます**。少しも明るい絵ではありません。しかし、見れば見るほど慰められるのです。政治家や町の有力者でしたらこういう時、元気な声を挙げて炊き出しを振舞う側になるでしょう。それが悪いとは思

いません。ボランティア自体は尊い行為です。けれども、振舞われる側というのは、たまたまそのような立場になったとしても、どこか惨めな思いを抱えるものです。ましてやそのことで援助する者が、どこか援助される人を蔑むような心を持つとしたら、それは却って差別を生むことになります。ここで、キリストは振舞う人ではなく、惨めな思いを抱えながら、しかし生きる労苦を骨身に染みて感じている人々の列に並んでいるのです。この絵は、何故キリストが飼い葉桶で生まれたのか、また、その知らせを真っ先に自分のものにしたのが野宿していた羊飼いであったというその意味を良く物語ってくれているように思えます。

[3] 神様は私たちに何を「与えた」のか

「飼い葉桶」、その中に救い主は、命の産声を上げられたのです！

今日私たちは招きの聖句として、コリントの信徒への手紙二の言葉も聴きました。8章9節です。「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。」

「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。」—キリストの貧しさとは何でしょうか。それは“貧相”とか“みすぼらしい”ということでしょうか？そうではありませんよね。キリストはひたすら「与えられる方」だから「貧しくなった」のです。本来は天の栄光に輝くお方なのです。天の大軍に讃美される方なのです。しかしその方は、この地の上に降りて来られました。正に「降誕」です。本当に神様の豊かさに満ち満ちておられるお方だからこそ、私たちのために与えることがお出来るようになるのです。このお方が私たちに一番与えたかったものとは何でしょうか？——神様の「命」です！「天にある命」と言っても良いと思います。

あのヨハネによる福音書3章16節を思い起こします。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。

聖書の約束は「一人も滅びないで」です。今日のルカ福音書でも、「民全体に与えられる大きな喜びを告げる」とありました。口語訳聖書では「見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える」となっています。そうです、「すべての人」です。人間は、人を排除し、差別しますが、神様は分け隔てなさいません。それは、私たち人間が皆、神様の思いに適っているからではありません。逆なのです。神様の前に立てば、私たちは皆等しく「罪人」、有罪判決を受けている者なのですから。そして、神様はその罪人である人間をとことん愛されたのです。神様は人間に対しては、裁くことではなく、愛することを選ばれたのです！

[結] 布にくるめられた幼な子が私たちに救う

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」。「独り子」とは主イエス・

キリストです。このお方は、神様の憐れみの心そのものです。福音書を読んでいくとこの方の憐れみの大きさが解ります。神は「世を」愛されたと、この「世」に敢えて入ってきて下さったお方は、今、この「世」、「世界そのもの」である飼い葉桶の中で布にくるまって眠っています。

私は今回、このルカの箇所を読んで、不思議に思ったことがありました。それは飼い葉桶の中で寝ているイエス様を、ルカは二度も「布にくるまって」と記していることです(7, 12 節)。赤ちゃんだからでしょうか？けれども、その語が無くても話自体は繋がると思います。そのことを思い巡らしていた時に私はハッとしました。ルカは敢えてこの「布にくるまって」という表現をしたのではないかと。そうだ、イエス様のご生涯は、生まれた時は飼い葉桶の中で「布」にくるまれ、ご生涯の最期、十字架にかかり、降ろされた後、アリマタヤのヨセフによって、「亜麻布」に巻かれながら、用意した墓に葬られたのではないかと、思いました。22 章 53 節にあります。

つまり、あの**飼い葉桶と墓は直結**しており、ここでの「布」は既にそのイエス・キリストのご生涯の目的を物語るものとなっていると言えるのではないかと思ったのです。そのイエス様のご生涯の目的とは、他ではありません、神様に背いて歩んできた私たち**罪人の身代わり**となって、**十字架**で神様の裁きをお受けになり、ご自分の命を献げることで、私たちを**神様の命に与る者、神の子**として造り変えて下さるのです。この**天に繋がる喜び**を私たちに与えるために、御子は十字架で命を献げて下さったのです。神の子としての命を、こんな私のために、私たちのために“与え尽くして”下さいました。**クリスマス**とは、神様がそのことを良しとされた日なのです！

クリスマス以前・以降で、**西暦**を数えます。来年はもう 2020 年。私たちは飼い葉桶で神の子が産声を挙げてから、全く違う時代を生きています。それは、あの**変えられた羊飼**いと同じです。「(彼らは)神をあがめ、讚美しながら帰っていった」とありますように、彼らはずぶやきではなく、不平ではなく、これまでなかった**神様への讚美**が心に生まれてもとの生活に戻っていったのです。私たちも同じです。きっとこれまでと変わらない苦勞の多い地上の人生の歩みかもしれないと思います。けれども、独りではありません。**インマヌエル(神我らとともにいます)**なるお方が、私たちの生涯の終わりまで、喜びを共に喜び、悲しみを共に悲しんでくださり、執り成して下さいながら、最後は復活の主と似た者として、迎えて下さるのです。

ですから、聖書の最後、ヨハネの黙示録はこう語ります。
「**今から後、主に結ばれて死ぬ人はさいわいである**」。(ヨハネ黙示録 14:13)

このお方は、神の栄光に富んでおられた方です。けれども私たちのために貧しくなられた。「それは、あなたがたが**彼の貧しさによって富むものとなるため**」(口語

訳) だとパウロは言いました。その豊かさとは何か、考えて見ました。そして思ったのは、先ほどのアイヘンバーグの版画絵は、私の想像ですけれども、ただの「炊き出し」だけではないと思ったのです。主は、私たち人間の列に入り込んで、やがて与る**神の国の食卓**へと私たちを連れて行ってくれる、それをも描いているのではないか。しばらくの私たちの地上の生活は、寒空と、忍耐と、痛みが続くのかもかもしれません。多分そうでしょう。しかし、この列に主イエスが入ってきてくださったからには、そこに**「天」が開けているのだ**と思います。私たちは神様から等しく愛され、赦されているのです。

ですから私たちも、この列の中で、一緒に前に前に進んでいるのです。羊飼いのごとく、「讚美しながら」一歩一歩進んで行きましょう！

さあ、来週はいよいよ、この方の御降誕です。イエス様、お誕生日おめでとう、ではなく、イエス様、ありがとうございます！と言いたいです。

お祈りを致します。